

お墓と供養について考える

皆さんは「お墓」について考えたことはありますか？ 現在肉親や先祖のお墓を管理している立場に無ければ滅多に考えない、もつといえど意図的に避けている方（縁起でもないとか）が大多数かと思われます。

ただ、お墓と全く無縁でいられる人生はほぼあり得ません。少なくとも自分自身のお墓をどうするかという問題がありますし、親もしくは祖先のお墓とその供養についても、大多数の方が（いつかは）当事者として関わってきます。誰しもが経験するであろうライフイベントの一つとして今回はこのテーマを考えてみました。

通信員特別アンケートについて

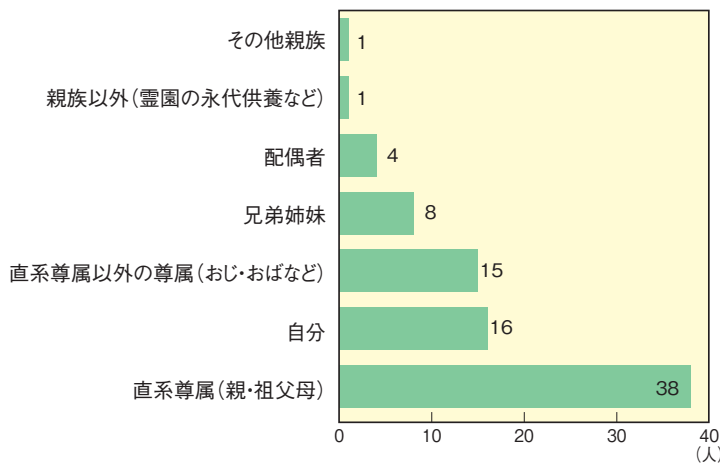
近年は少子化に伴い、「お墓の継承」に関する問題が注目されています。祖先のお墓をどう管理してゆくのか、そして自分自身のお墓のあり方について、現役地方公務員の方々の生の声を知りたく、今回は特別にアンケートを取りました。対象は当機関誌「ALPS」の通信員の皆さまで、七四名の方からご回答を頂きました。通信員はほとんどが現役の地方公務員の方です。

●「自分」が管理しているケースは少ない。しかし…

表1 お墓の主な管理者は？

◎設問1

いま、祖先（ここでは親・祖父母・曾祖父母など直系の尊属で一番親等が近い方）のお墓を、主として管理されているのはどなたですか？（複数回答可）



まず現在の祖先のお墓の管理者について尋ねてみました。結果は表1の通りで、圧倒的に親または祖父母が管理しているケースが多いのが分かります。これは回答者が現役の職員対象のため、年齢的に親が健在の方が多いからでしょう。次いで「自分」が一六名となっています。こう見ると「自分」がお墓の管理に直面している方は少ないのですが、別の設問（表3）で「将来自分が祖先のお墓を管理する立場になるだろう」と答えている方が三一名もいらつしやいます。

●自分が管理しているお墓は子孫に継がせたい

次に、表1で「自分」と答えた方に、今管理しているお墓を子供等に継がせたいか尋ねました。結果は表2の通りで、ほとんどの方が「はい」と答えています。なお、回答数（一九）が表1の「自分」の数と合っていないですが、これは表1で「自分」と答えていない方で表2に回答されたケースが三件あるからです。ちなみにその三名はすべて「はい」で回答しています。

表2 自分が管理しているお墓を継承させたいですか？

◎設問2

設問1で「自分」を選ばれた方へ、そのお墓を自分の子供（親戚などを含む）に継承させたいと思いますか？

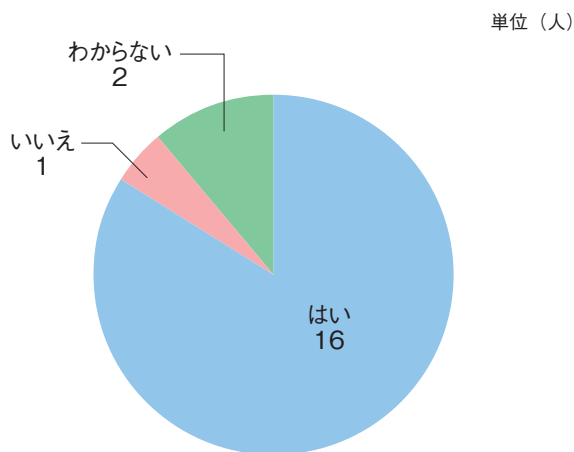
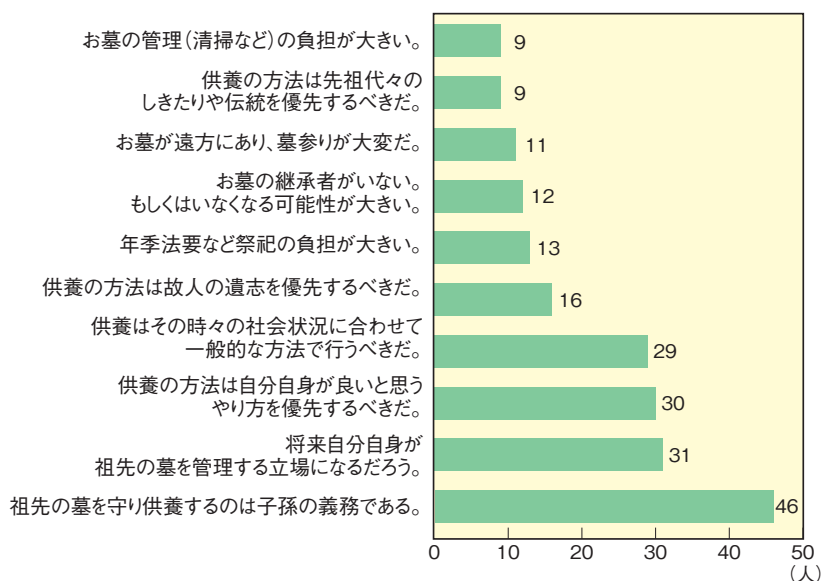


表3 祖先の供養について同意できるもの（複数回答）

◎設問3

全員に伺います。祖先の供養について、下記の項目のうちご自身で「そう思う」ものを選んでください。（複数回答可）



●祖先の供養は子孫の義務である。負担は大きいが：

続いて、祖先の供養について、ご自身で「そう思う」ものを複数選択方式で回答していただきました。結果は表3の通りです。

供養の方法については、伝統やしきたりよりもその時々々の社会情勢に合わせて一般的な方法で行うべきと考える方が多数でした。また、故人の遺志より自分自身が良いと思う方法を優先す

るべきという考えが優勢のようです。供養の方法はともあれ、大多数の方（四六名）が「祖先の墓を守り供養するのは子孫の義務だ」と考えておられます。

一方、年季法要やお墓の管理、墓参りに伴う負担の大きさを感じている方も少なからずいらっしゃいます。自由意見で「お墓が山の中にあり、周りのお墓が移転で減るとともに通路を掃除する人がほとんどいなくなり、掃除

の負担が増えた」とか「嫁いだ家の墓だけでなく実家の墓やその他親戚の墓などいくつもの墓を維持するよう要求されているが、到底無理」といった具体的な負担を報告されている方もいます。また「お墓の継承者がいない、いなくなる可能性が高い」ことに同意される方が一二名いらっしゃいます。

●管理者不在、いざとなったら：ここで「もし祖先のお墓を近所で管

表5 自分自身のお墓について

◎設問5

自分自身の墓所（お墓を立てる場所）はどうされるおつもりですか？
1つ選んでください。

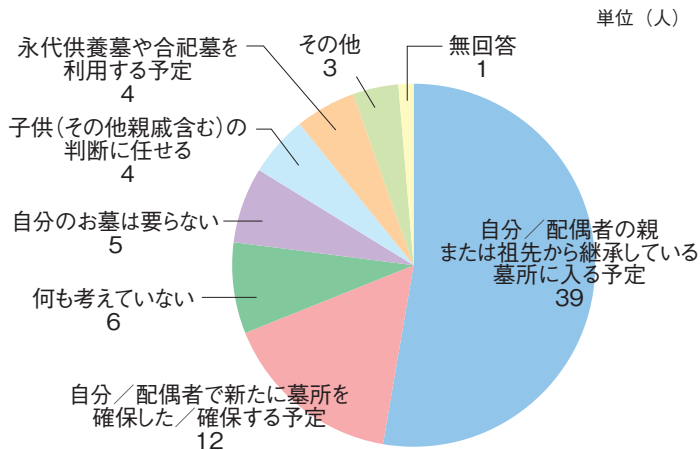
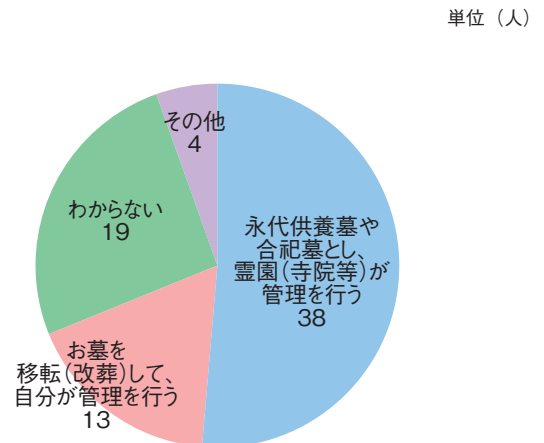


表4 近所に祖先のお墓を管理する人がいなくなったら？

◎設問4

子孫の転居などにより、祖先のお墓を近所で管理する親族がいなくなると仮定した場合、どのような取扱いとしたいですか？ 次のうちから1つ選んでください。



理する親族がいなくなると仮定した場合、どうしたいか」という仮想質問を行いました。結果は表4の通りで、半数以上の方が永代供養墓や合祀墓の利用を希望しました。ただこの結果は、この後の設問の結果と併せて考えると、「自分がいる限りほぼ想定できない事態であるが、万が一そうなたらやむを得ない」というレベルでの回答が多かったかと思われます。

●自分自身のお墓は半数以上が継承利用派

今度のご自身のお墓について尋ねました。もちろん今あるわけではないので将来の話です。まず、自分自身の墓所の調達について尋ねた結果が表5です。半数以上の方が「自分／配偶者の親または先祖から継承している墓所に入る予定」と回答しています。回答者に地元在住の方が多いのがその理由かと思われます。新たに墓所を調達する（した）と答えた方は一二名。次いで「何も考えていない」「自分のお墓は要らない」「子供等の判断に任せる」「永代供養墓や合祀墓を利用する」と続きます。

●自分の墓は「自分で決める」派と「任せる」派が拮抗

続いて、自分自身のお墓（特に立地）

についてのあり方について尋ねました。結果は表6の通りで、見事に「自分自身の意思・意向が反映されるべき」と考える方と「継承者の判断に任せるべき」と考える方が同数でした。

●自分のお墓は無縁墓にはならない？

次に、自分自身のお墓が将来無縁墓となる可能性について尋ねました。結果は表7の通りで、半分の方が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答しました。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた方は約四分の一でした。

●自分自身のお墓の将来について

最後に、表4と同様の仮想質問を自分自身のお墓について尋ねました。結果は表8の通りで、やはり過半数の四一名が永代供養墓や合祀墓の利用を選択されました。移転希望派は十四名です。中には「そのまま（放置）としてほしい」に回答された方も六名いらっしゃいます。その他の回答として「自分自身のお墓は要らない」というものや、「お墓を移転せず、引き続き子孫が管理してほしい」というものがありました。

表7 自分自身のお墓が無縁墓になる可能性

◎設問7

「将来、自分自身のお墓が無縁墓になってしまうかもしれない」と思われますか？

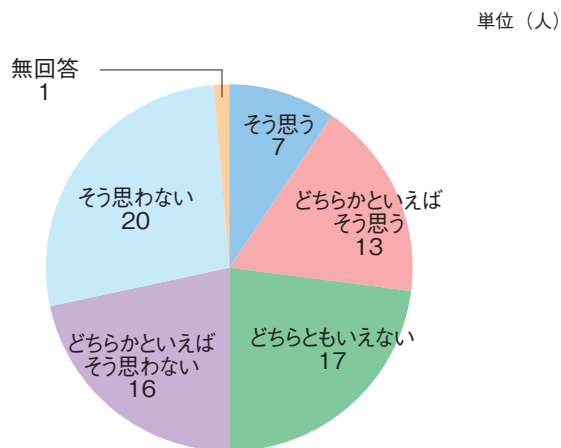


表6 自分自身のお墓（特に立地）について

◎設問6

自分自身のお墓（特に立地）について、次のうちからご自身のお考えに近いものを1つ選んでください。

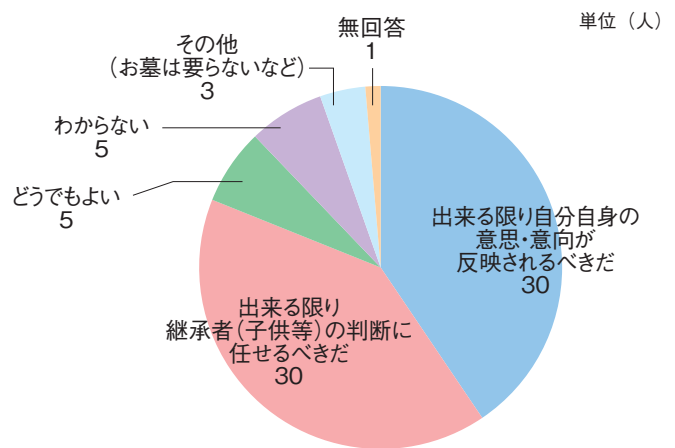
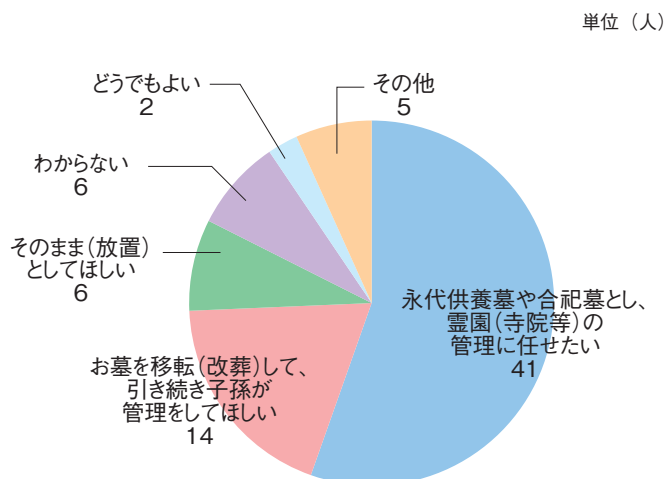


表8 近所に自分自身のお墓を管理する人がいなくなったら？

◎設問8

ずっと将来、子孫の転居などにより、自分自身のお墓を近所で管理する親族がいなくなると仮定した場合、どのような取扱いを希望されますか？ 1つ選んでください。



自由意見

自由意見では、先に挙げたお墓の管理負担の問題の他に、墓地の取得や管理に関するお金の問題（高い、価格が不透明など）を挙げた方が多数いらっしゃいました。あと、「祖先を敬う気持ち大切です」という意見も多くありました。その他、意見の一部をご紹介します。（本当に一部です…）

- ・「お墓を購入したいが、自分自身、管理することに自信がない」
- ・「祖父母の墓の管理は父母がしてい

ますが、墓と父母の住所と私の住所はばらばらです。将来、父母の墓をどうするのが良いか漠然と不安を感じています」

- ・「悩みとしては大きいのに、まだまだ話題とするのはタブーという雰囲気があるように思います」
- ・「何を基準にどうやって選んだら良いのか見当がつかない」
- ・「お墓を移したいが、田舎の住職が理解してくれない」

アンケートから見えてくるもの

今回のアンケートでは、お墓に対して「代々守り継いでゆくべきもの」と考えている方が多数を占めていること、その責任が将来を含めると自分にあると意識されていること、お墓の継承について懸念している方が比較的少ないこと、総じて「しつかりしている」という印象を受けました。とはいえ、管理・供養にかかる負担の大きさや継承者不在の懸念を訴える声も少なからずあります。今回はサンプルが小さいので年齢別分析は行っていないませんが、自分自身がお墓を管理する立場になれば認識が変わるのかもしれない。

専門家にお墓の現在事情を聞く

今回のアンケートに加え、お墓の現在事情をさらに詳しく知るため、その道のプロにお話を伺いました。お話をいただいたのは、「株式会社メモリアルアートの大野屋」（東京都豊島区）経営企画本部コンタクトセンターの尾崎一郎所長です。メモリアルアートの大野屋は墓石業者として国内大手で、大都市圏を中心に墓石の販売を行っているほか、葬儀や仏具販売など葬祭に関するトータルを手掛けています。



(株)メモリアルアートの大野屋
コンタクトセンター 尾崎所長

●お墓を建てるプロセス

——私はお墓を建てるという経験をしたことが無いのですが、実際にはどういった流れでお墓ができてゆくのでしょうか？

「プロセスの面からいえば、大体家を買うのと同じプロセスをたどると考えていただいてよろしいかと思います。つまり、家の場合は土地を買ってそこに業者を呼んで住宅を建ててもらうわけですが、それと同じで、墓地を使用する権利を買ってその上に我々のような墓石工事業者に発注するという形で作ってゆくわけです。そこで一般的には、ご不幸が起こって、第一にくるのは『ご供養しなくちゃいけない』という思いです。そのために条件として距離的なこととかどんな形にするのかとかご予算のこととかという選択肢が出るわけです。一方で生前に将来のため

にとか、一つの生きた証としてとかという形で捉えられている方はそれがまったく逆な形になります。こんな形で

墓を作りたいのだからそれができる霊園はどこかとか、そういうプロセスをたどる方も最近が増えていきます。ただ全体的に見て優先順位を考えると、まずとにかくご供養したい、できることというのが第一順位ですね。ご遺骨を納めて故人にお祈りや報告をすることで、心の安らぎを得るということですが、それについては（お墓を）求められれば、達成できているのではと思われれます。

優先順位が下がってくる部分では、やはり妥協というものが入ってきます。こういうものを作りたいが予算の面で……といった感じですね」

——お墓を新しく求める場合に最重視される条件というのは、やはり心ゆくまでお参りができること、すなわち立地ということですか？

「そうですね。求められる方にとつてアクセスが良いということです。例えば一家のご主人が亡くなる場合、慣習的には配偶者もしくは長男が祭祀の主事者となり、お墓を決める権利を持ちます。ただ選択にあたっては家族の意見も当然聞くことになります」

——アンケートでは、自分自身のお墓の立地について「自分の意向が優先されるべき」という方と「継承者（子供等）の判断に任せるべき」という方が拮抗していましたが、祭祀者の方の意向が最優先で、その次にもし本人が生

前に意向を残されている場合はそれが考慮されるということですね？

「そうですね」

——それらがち合うということはあるんですか？ 立地に限って例えれば、自分が「私はここに墓を立てたい」と思っているも子供らが別の場所に住んでいて「いや、そこはだめだ」というみたいなの……

「それはあると思います。ご家族でそういった議論がある場合は、私どもは『よくご相談ください』としか言えないのですが……よくあるケースですが、生前に墓地を選ばれる際には割と奥様の意向が反映されていて、ご主人のほうは奥様に任せているのです。そうやってご夫婦の間では決まりますが、子供さんとなりますと、こういった話では立場は残る者の方が強いのです……対立するというより、後に残る子供に迷惑をかけたくないという思いが非常に強いのです。まずご夫婦の間で場所をお決めになって、それからお子さんを現地に呼び寄せて相談するという流れが多いですね」

●従来の形態のお墓がまだ主流、ただし石碑の外観は多様化

——個人単位、あるいは夫婦単位のお墓を希望されている方が増えていると聞きますが、実際はどうなのですか？

アンケートでは過半数の方が、自身身については親などから継承された墓を引き継ぐと回答していますが。

「個人単位、あるいは夫婦単位のお墓も確かにありますが、一割未満ですね。残りの九割は従来の家単位のもの。ただし、永代供養墓とか樹木葬などの形態のお墓についてのお問い合わせが増えてきているのが注目されます。実際のお墓の選択で増えているのは、洋風のものとか石碑に『○○家』と彫られていないものなど、石碑のスタイルの面でのバリエーションですね。技術的にもいろいろな要望に応えられるようになっていきます」

——お墓を作るにあたって、家のしきたりやしがらみの関係で、自分の希望するような条件でのお墓が作れないということはあるのですか？

「地方公務員ですと全国なので、家を守るのかそういうことがあるかもしれませんが、都市部に限っていえば、自由度は高いです」

●増えているお墓の引越しへのニーズ

「最近の傾向として顕著なのですが、逆に、地方でお墓の面倒を見てくれる人がいなくなったからこっちにお墓を引越ししようとお考えの方が都市部では多いですね。生活の本拠が都市部にあつて、一方で肉親のお墓が郷里にあ

つて物理的に供養がなかなかできないことを気にしているのです。そこでお墓を引越しさせて心の安らぎを得たいというわけです。また、郷里の親戚が高齢化しているとか、世代交代で縁遠くなつてしまい、肉親のお墓の管理を任せることが難しくなっているという要因もあります」

——アンケートでは将来近所でお墓を管理できる親族がいなくなった場合に、お墓の移転（改葬）を望む方が二割弱いらついています。

「改葬の流れについては、フロッピーヤート（九ページ）をご参照ください。十数年前はお墓の引越し自体出来ることを知らない方が多かつたのですが、インターネットなどで情報が入手しやすくなり、一般にも認識が高まつたようです。基本的な手順は大体固まっていますが、やつてしまえば意外と難しくなく、期間も準備段階から入れて三か月程度でできたりするのです。引越しを実行された方は、お参りできる頻度が格段に増えることで、かなり高い満足度を得られています」

●永代供養墓や合祀墓について

——お墓を見てくれる親族がいなくなつた場合、永代供養墓や合祀墓の利用を望む方が多くいらついていますね。

「永代供養墓や合祀墓についての問い合わせは結構あります。永代供養墓などは、お墓の祭祀者となるべき方がいない方が選択されるようです。お寺でも永代供養は大抵のところをやっているはずですが、施設として永代供養墓を整備しているところはまだまだ少ないです。基本的に、配偶者など家族がいて供養できる限りは個別のお墓で供養したいという考えが強いですね。お寺側でもその辺のニーズを汲み取って、「永代供養の個別墓」というタイプのお墓を提供しているところもあります。つまりお墓そのものは従来の「○家」という形ですが、あらかじめ管理料なりお布施を払っておき、連れ合いが亡くなったときは自分が管理し、自分自身もいなくなつて管理する子孫がいなくなつた場合は、お寺側で一定の年数は定期的に供養してくれ、それが過ぎると合祀墓に移されるということです。そういうシステムに関心を示される方は多いです」

●お墓と遺骨はやはり必要

——アンケートで、自分自身のお墓について「要らない」とお答えの方が七四名中五名いらっしゃいましたが、実際にはどうですか？

「よくマスコミ等で散骨が取り上げられますが、話題性が先行しているよ

うで、実際には、家族がいる場合でお墓を必要としないケースは殆どありません。一万件に一件あるかないかではないでしょうか。ご本人が気軽に「自分のお墓は要らないよ」とか言うことはよくありますが、遺された家族の立場からすれば、お墓もない、遺骨もないところで何に対して拝めば良いのか、よりどころが無くなってしまうのです。散骨のケースでも大多数の方は遺骨の一部を撒いており、ちゃんと別にお墓を用意していたりします。また、遺言に従つて遺骨を全部散骨されたご家族の中には、拝む対象が無くなったことで後悔したという話も聞きます。合祀墓や樹木葬の場合は、まだ祈る対象があるので心の拠り所になりますが、全く無いというのはご家族にとつてはつらいですよね」

——やはりお墓なり遺骨というのは大切なのですね。

●ペットと一緒のお墓

「あと最近増えているのが、ペットと一緒にお墓に入れてあげたいという要望です。昔と違い、もはやペットという言い方自体に抵抗を感じる方もいて、まさに家族の一員という位置づけなのです。従来の墓地では動物と一緒に入れられないので、そういうニーズを満たすような墓地が新たに作られて

いて、大変人気があります」

●これからのお墓と供養について

——これからのお墓と供養の方向性について教えてください。

「方向としては、自分が供養したい人を自分が満足できるような方法で供養する、それを満たすようなお墓の立地や形式が求められるでしょう。家族構成の変化や社会移動から、従来の○○家先祖代々の墓といった形式は減るかもしれません。またお墓の引越しも増えてゆくでしょう。ただご供養をしたいという思いは変わらないでしょう。そして私どもはそのご希望を満たすようなサービスを行うこととなります」

——今後形は変化するかもしれませんが、ご供養をしたいという人の気持ちと、それを満たす場としてのお墓という存在は残り続けるということですね。ありがとうございます。

●おわりに

アンケートと取材を通じて、肉親や先祖をきちんと供養したい、しなければという人の思いは、これだけ社会情勢が変化した現代でも変わらないのだということを再認識しました。

(取材・協会職員・前村浩一)

改葬の流れ

((株)メモリアルアートの大野屋パンフレットをもとに作成)

